

複合的資源管理型漁業促進対策事業

杉山 秀樹、船木 勉、杉下 重雄

【目的】

秋田県においては、平成元年から資源管理型漁業促進対策事業に取り組み、ハタハタ、ヒラメ、マガレイなどの広域回遊魚種をはじめ、アワビ、サラガイ、シロギスなどの沿岸重要魚種などを対象に資源管理計画を策定した。その結果、対象資源の合理的利用、漁獲量の安定などの面で大きな成果を上げるとともに、「資源管理型漁業」について県民に広く普及することができた。

平成10年度には、秋田県複合的資源管理型漁業促進委員会を設置し、「活動指針」及び「活動計画」を策定した。この中では、従来の魚種管理に加えて、漁業実態に即した資源管理の成果が、漁業経営に反映する取り組みを計画的、効率的に展開していくことを目的とした。

これらを踏まえ、平成12年度は漁業経営の安定と漁業の持続的発展を図ることを目標に、主要魚種の資源動向、試験調査、研究、販売促進、漁業実態の把握を目的に調査を実施する。

なお、本事業の詳細については、別に「平成12年度複合的資源管理型漁業促進対策事業報告書」として報告していることから、ここでは調査方法及び結果の要約について述べる。

【方法】

1. 漁業実態調査

底びき網による投棄魚及びハタハタの漁業実態について標本船調査を実施した。

2. 漁獲統計調査

秋田県農林水産統計年報秋田県の漁業の動きによりマダイ、ヒラメ、マガレイの漁獲量の推移及びマダイ、ヒラメの生産額・単価の推移を調査した。

3. 生物測定調査

ハタハタの雌雄別体長・体重・生殖腺重量の測定と、マダイ、ヒラメ、マガレイの漁法別体長測定を実施した。

また、ヤナギムシガレイの年齢と成長、産卵時期について調査した。

4. 試験操業調査

調査船千秋丸による、底びき網試験操業による1回当たりのハタハタの漁獲尾数（CPUE）、年齢組成を調査した。

5. 産卵状況調査

県内の各産卵場にて、スキューバ潜水によるハタハタ卵塊調査を実施した。

6. 放流効果調査

県内4市場において、マダイの背鰭カットとヒラメの体色異常の混獲率を調査した。

7. 管理効果把握調査

ハタハタに関するこれまでの試験操業や環境観測等で収集された資料を整理・解析し、資源量の予測の可能性を検討した。

8. 加入量調査

開口板付き曳網によるハタハタ、マダイ、ヒラメ・マガレイの稚魚発生量を調査した。

9. 小型魚再放流調査

ごち網に入網するマダイ当歳魚を効率的に網外へ逃避させる目合いを検討した。

10. 遊漁実態調査

調査船第二千秋丸で「電気釣り」の釣獲調査を行った。

11. 情報収集・広報

イベント「秋田旬の魚ふれあい祭り」を開催し、資源管理に関するアンケート調査を実施した。

【要約】

1. 漁業実態調査

ホッケ、アブラツノザメ、ニギス、マダラ、スケトウダラ、カナガシラ、ヤナギノマイ、アカムツ及びイシモチの小型サイズが主体に投棄されていた。

2. 漁獲統計調査

平成7～11年の漁獲量は、マダイが100～140トン、ヒラメ200～290トン、マガレイ80～130トン台で、生産額はマダイが1.4～1.7億円、ヒラメ3.4～4.4億円、単価はマダイが1,000～1,400円、ヒラメ1,500～1,800円台の範囲で推移していた。

3. 生物測定調査

ハタハタの生殖巣の発達度、海況、水温条件などから季節ハタハタの初漁日は、12月11日頃と予想された。

4. 試験操業調査

9、10月に漁獲したハタハタの体長組成と10月以降新規加入群である2歳魚の割合が増すことから、今年の季節ハタハタ漁は2.3歳魚が漁獲の主体で、特に、2歳の占める割合が多くなると推察された。

5. 産卵状況調査

ハタハタの卵塊密度は、県北部（八森・能代）で接岸量が減少した影響で低下したが、県中央（船川備蓄、北浦）及び県南部（金浦）で高い値を示した。また、

これまで海藻は豊富であったが、卵塊が見られなかった北浦湯の尻で数多くの卵塊が確認された。

6. 放流効果調査

- ・市場調査からマダイの有標識率（0.8%）、混獲率（7.0%）、ヒラメの有標識率（2.0%）、混獲率（4.8%）、と推定された。
- ・ヒラメの体色異常の典型的な放流魚は最近少なくなって確認しづらい状況にある。

7. 管理効果把握調査

東京水産大学桜本和美助教授に「秋田県におけるハタハタの再生産関係を考慮し、資源量予測制度の向上」について研究委託を行った。

8. 加入量調査

- ・ハタハタの1網当たりの採捕尾数は、2,500尾で、平成11年度の4,427尾に次ぐ値であった。
- ・マダイ当歳魚の曳き網面積1畝当たりの採捕数は22.6尾で、平成11年度（21.2尾/畝）並の発生量があったものと推察された。
- ・ヒラメ当歳魚の曳き網面積1畝当たり採捕数は1.3尾で、平成11年度（9.4尾/畝）に比較し低い値であった。
- ・マガレイ当歳魚の採捕数は14尾であった。

9. 小型魚再放流調査

- ・漁獲したマダイの個体数と尾叉長は、袋網の目合2寸で189尾、120～310mm、袋網の目合2.3寸目で306尾で140～350mmの範囲であった。
- ・袋網の目合い2.3寸目で尾叉長170mm以下での高い逃避が認められた。

10. 遊漁実態調査

- ・調査員6名が午後5時30分から2時間電気釣りで釣獲した魚種は、マアジが主体で227尾（21.1kg）、マサバが7尾（0.8kg）であった。

11. 情報収集・広報

- ・平成12年10月14日秋田市土崎港セリオン屋外広場を会場に「秋田旬の魚ふれあい祭り」を開催した。
- ・イベント参加者は約2,000人で、そのうち205人からアンケート調査の回答を得た。
- ・資源管理漁業で漁業者が取り組んでいる小型魚の保護について、7割近くの人が知っていると回答していた。
- ・小型魚の保護で取り組んでいる大きさヒラメ全長30cm、ハタハタ全長15cm、マダイ全長14cmについて、ヒラメ14%、ハタハタ30%、マダイ37%がもっときびしくと回答していた。
- ・資源管理のため、一般遊漁者も漁業者と同じ制限について、8割がある程度必要と回答していた。
- ・資源をふやすため、ハタハタ、マダイ、ヒラメなどの種苗放流について、9割近くが必要と回答していた。

た。

- ・漁業者がマダイ、ヒラメ稚魚放流のため協力金を負担していることについて、4割が知らないと回答していた。